昭和四十三年七月廿八日　講師　原口鶴雄先生

第拾九回史跡めぐり栞

（岩槻市内跡之部）

越谷市郷土研究会

越谷市郷土研究会

岩槻市旧跡見学案内

コースと所要時間

岩槻駅前
↓ 五分
○ 芳林寺　十五分
↓ 十分
○ 浄国寺　三十分
↓ 五分
○ 洞雲寺　六十分（中食）
↓ 二十分
○ 遷喬館　三十分
↓ 十分
大手門　十分
↓ 十分
○ 浄安寺　三十分
↓ 五分
時の鐘　十分
↓
○ 県立青年の家
↓
時の鐘
↓ 二十分
○ 岩槻城址公園　三十分

第十九回　史跡めぐり　コースと図参照
期日　昭和四十三年七月廿八日　日曜日
午前九時四十分　越谷駅前集合
午前十時発　岩槻行バス
講師　原口福舟氏
会費　四百円（昼食・バス代を含む）

㊟
歩行時間　一時間三十分
見学時間　三時間三十五分
全所要時間　五時間五分
解散時刻（岩槻）　午後四時五分

備考
越谷行バス　岩槻発　午后三時四〇分
〃　新曲輪発　〃四時
〃　岩槻発　午後六時一〇分
飯塚廻りの岩槻発　午后四時一七分〜五時二五分
〃〃

解説

一、芳林寺　曹洞宗（大平山芳林寺）

開山は覚翁文哲禅師，文禄四年（一五九五）七月二十六日寂・芳林寺は元比企郡松山（東松山）にあった地蔵堂を、太田資高が永禄十年（一五六七）岩槻城主太田家ゆかりの地として、世芳林院妙善大姉追福のため、ここに移し・芳林寺と改めて開基した。

文明十八年（一四八六）七月二十六日太田道灌が相州糟屋の上杉定正の館で、定正に討たれたので、その遺髪を堂側に埋め、又太田源五郎氏資が永禄十年（一五六七）八月十三日上総の三船で戦死したその遺骨を道灌の遺髪の脇に埋めた。それが墓地内にある太田家霊塔である。

芳林寺は文化八年（一八一一）火災に遇い、天保十二年（一八四一）五月に現在の堂宇が再現された。地蔵堂の地蔵像は本堂内に安置されてある。

二、浄国寺　浄土宗　佛眼山浄国寺

民家十八檀林の随一といわれ、浄土宗僧侶の修業道場であった。

開基は天正十五年（一五八七）岩槻城主太田氏房、開山は氏房にゆかりの　学徳高き鴻巣勝願の住職　慈誉清巌上人で、浄国寺は勝願寺の末寺である。

氏房はこのとき寺領として山林二万七千坪を寄進した。

本堂＝氏房の建立した本堂総門は、慶長十年（一六〇五）火災のため焼失・第三世　深誉伝察上人　徳川家康に請うて本堂再建・お礼言上のため駿府（静岡）に赴く。家康駿府城内の

門と下馬札を賜う。元禄年間再び堂宇焼失。

総門　明治二十二年焼失

假本堂と巾着紋　　再三火災のため經營難に陥りしため、佛服舍利を江戸に開帳し、その賽銭で出くじを買いしところ、つづけざまに当り、忽ち再建の資金が出来て、今の假本堂百三十五坪を建立した。以来巾着三個連ねたるものを寺の紋章とし、福利紋巾着というようになった。

佛服舍利堂　　給六坪、釈迦如来左服の舍利宝珠は浄国寺第一の寺宝で、その由来は昔唐の玄奘三蔵が天竺へ渡って那蘭陀寺から賜られ、唐の大宗皇帝に献上した。それから玄宗皇帝に至り、その後　楊貴妃のために日本の朝廷へ贈られた。その後尾張の熱田神宮へ奉納された。

それが更に、今から五と八年前後小松天皇の明徳元年（一三九〇）に、武州秩蔵和尚が熱田神宮の宮司範親からこの舍利をゆづり受けて持ち帰り、秩蔵和尚の開山である羽生市三俣の福蔵寺へ安置した。

その文明年間に小田原北条氏と　上杉謙信氏が関東で勢力争中、神社佛閣の焼討ちが始まり、民家をも焼き拂う有様であったので、その間この舍利は転々としていたが、武州忍城主成田下総守長泰の家臣坂巻氏の許へ伝わり、更に忍の住人菅原左衛門佐直則の手に移った。

其の頃氏房によって浄国寺が建立され学徳高き恕巻清巌上人が開山されたと聞いた菅原直則が、これを浄国寺へ寄進され第一の寺宝となって今日に至ったのである。

城主氏房はこの舍利を疑って、石の上に乗せ鉄の槌で強く打ったところ、石は砕け、槌は凹んで舍利だけは異状なかった。

舍利は知って光明を放ったので、氏房はこのあまり自らの疑心を恥じ、改めて舍利を尊信し、浄国寺の山号を佛服山と名づけた。

現在十六坪の佛服堂は大正十三年、第四九世源誉信之上人の修復である。その他の寺宝凡そ百点、墓石として有名なのは城主阿部家の墓、乗願寺氏の墓カクレ切支丹の遺蹟お茶水の井戸。

等がある。

三洞雲寺　曹洞宗　加倉山洞雲寺

天文元年（一五三一）岩槻城主太田美濃守資朝（後の三楽斎資正）が開基した寺で、開山は入間郡越生町龍ヶ谷龍穏寺九世刹使布州東梅禅師である。

（龍穏寺は旧梅園村で太田道真の開基で道灌の生家である。）

当時の洞雲寺は東西十四間・南北五十二間・総坪数七三〇余坪であったが、東山天皇の宝永年間今から凡そ二六〇年ばかり前に焼失、その後小規模の寺が再建されたが、故あって昭和廿五年現在の新築を見るに至った。

山門の木組は市の指定文化財となっている。

四　遷喬館（旧岩槻藩校）

遷喬館は岩槻藩の碩学南柯兒玉先生の私塾として寛政十一年（一七九九）に建てられ、文政元年（一八一八）城主大岡忠固公はこれを藩校

メモ

にした。私塾から独立に昇格した学校は、江戸に十五校あったが、原形のまま現存している藩校は遷喬館唯一つである。

建坪四〇坪、萱葺平屋建である。

遷喬館の教育方針は会約にもうたわれている通り、民主々義の教育であった。

南柯先生の生涯については、遷喬館において、詳しく述べることにする。

先生の墓は岩槻旧渋江町浄安寺にある。

五、大手門

前玉県庁は初め（明治四年七月）岩槻芳林寺におかれたが、故あって翌年十一月、浦和に移され、新庁舎完成の際、県庁正門として岩槻から買収され、後に知事公舎の門となり大沢雄一知事のとき、浦和市常盤町四丁目十一番八号の新公舎が移転するに際し、岩槻に戻されたものである。

六、浄安寺

浄土宗　快楽山微妙院浄安寺

浄安寺は元真言宗であったが、久しく龍寺となっていたのを、永正二年（一五〇五）増上寺第五世天誉了圓上人が改めて開山し、浄土宗に改めた。

幕末、天正年間まで、東国八百八十郷の触頭であった。天正十五年（一五八七）岩槻城主の太田氏房より与えられた文書の写しは下の通りである。

当寺並末寺被寄不入之事自今以後不可有相違者也仍如件

天正十五年丁亥十月十八日　　氏房　（黒印）

慶長五年（一六〇〇）徳川家康勢州小山へ出陣の際、浄安寺に御一泊、慶長七年（一六〇二）十一月二十五日寺領六十二石三斗御朱印下賜、城主代々特別に扱われた。

寛永年中、越後少将忠輝の嫡子徳千代（新潟武藏風土記稿には、徳松君、西堂見相院とあり）並妹君　※見相院城主阿部対馬守重次にお預けになった。見相院日覚永九年（一六三二）四月十三日逝去、ついで五月廿七日徳千代君も妹を慕うて逝かれ、共に当寺に葬られ、同形の墓石が列んでいる。城主高力河内守清長の墓石もあり（慶長五年十二月廿五日卒）　現在南面の墓石、その他がある

（文政十三年一八〇〇、正月四日卒）

当寺はしばしば火災にかかり、延享年中（一七四四～一七四七）浄誉上人の代に類焼及び元禄年中（一六八八～一七〇三）再火焼失、更に安年中茗荷焼失

寛延三年（一七五〇）八月四日、増上寺の一文寺次誉上人入住して宝暦二年（一七五二）八月四日再建して今日に至っている。

当時　境内は、三万坪といわれた。

四空柳　二体あり

七、岩槻城址

現在公園、野球グランド、テニスコート、青年の家、福祉会館建設地は、昔は御居曲輪・銀沼曲輪といわれていたので、この総称を「お林山」といっていた。

お林山は城の一部ではあるが、正式に城址と云うのは、「本丸・二の丸・三の丸のあつたところで、これは明治十一年（一八七八）士族や民間に払い下げとなったので、現在は宅地や耕作地となっている。

岩槻城は今より五百十年前、長禄元年（一四五七）三月、鎌倉扇ヶ谷上杉氏の臣　太田道灌公築城以来、明治四年（一八七一）の廃藩置県

に至るまで実に四百十三年の長期にわたって、武家政治の行われた名城である。

その間　幾多の盛衰興亡の厂史がくり返されたが、遂に明治十一年（一八七八）の春、城内の建造物はことごとく解体され、本丸、二の丸、三の丸の城地は、大方民間へ拂下げとなつたの

以上

原口蔚舟

◎青年の家

其他参考記録　場所、文書、碑文等

解説者